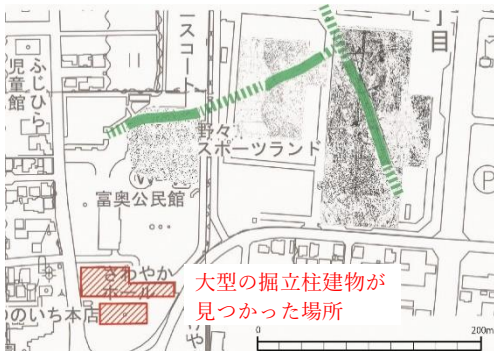


# 古代 栗田遺跡の道

人々が生活していた村をつなぐと考えられる道も発掘調査によってみつかっています。



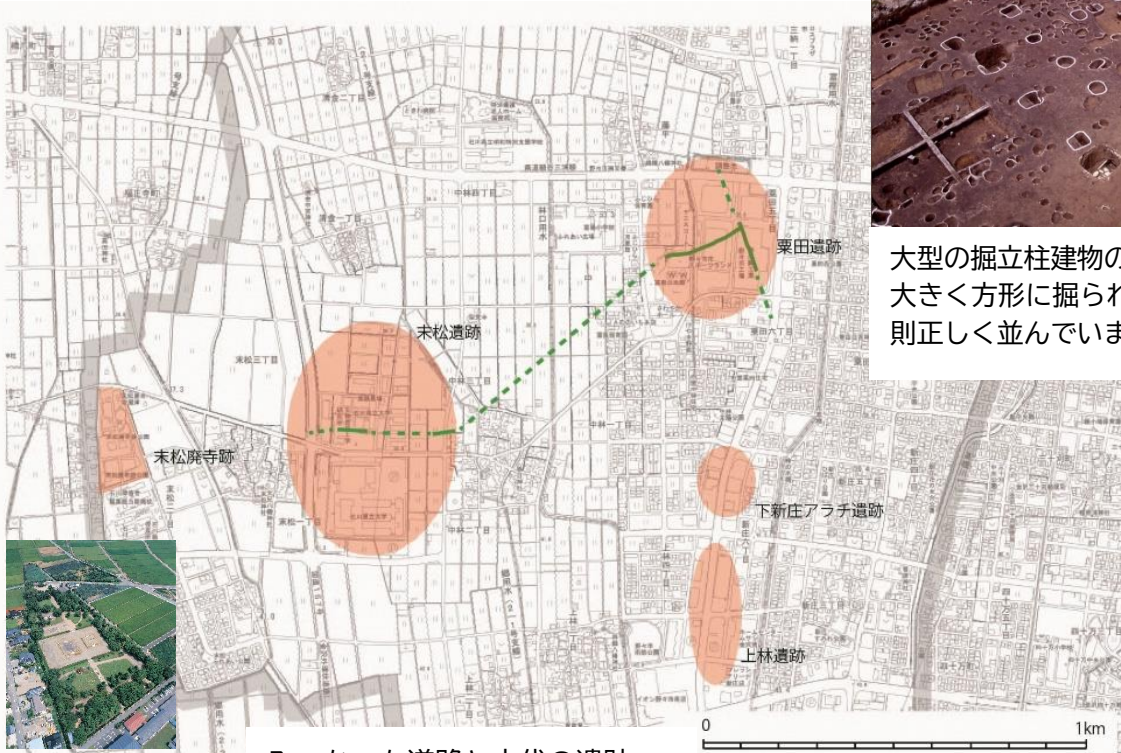
あわだ 栗田遺跡は、<sup>じょうもん</sup>縄文時代から中世の村の遺跡です。

発見された路面は、幅4～5m前後で、道の両脇に側溝が掘られています。道が整備されたのは奈良時代の中頃で、途中で補修されながら平安時代前半ごろまで使用されていたようです。

栗田遺跡では南北方向と西方に枝分かれする道が見つかっており、南は下新庄アラチ<sup>しもしんじょう</sup>遺跡、西は末松<sup>すえまつ</sup>遺跡といった大きな村や古代の寺院跡である末松廃寺<sup>すえまつはいじ</sup>に伸びています。このように村等をつなぐ道が交差する栗田遺跡では、大型の掘立柱建物<sup>ほったてばしらたてもの</sup>が複数みつかり、交通の要所として何らかの公的な施設が置かれていたと考えられます。



大型の掘立柱建物の跡  
大きく方形に掘られた柱穴が規則正しく並んでいます。



みつかった道路と古代の遺跡

実線：みつかった道路  
破線：推定経路